

小特集⑤

ボコ・ハラムのテロ激化と周辺国への拡大

イスラム過激派組織ボコ・ハラムがテロや襲撃などの暴力的活動を激化させている。こうした活動はこれまでナイジェリア北東部のものがほとんどであったのだが、今号採録期間（2015年1～3月）中にカメルーン、チャド、ニジェールといった周辺国へと戦線を拡大させている。そこで、ここでは今号採録期間中の動向をまとめて整理することとする。

ボコ・ハラムとはシャリア（イスラム法）の導入を求めるグループで、欧米の教育や価値観を否定している。2002年の設立当初は穏健派であったが、2009年以降過激化、ナイジェリア北東部で政府機関やキリスト教会、穏健派イスラムなどを対象としたテロをおこなっている。特に2014年4月に女子生徒200人を誘拐し世界からの批判を集めたのは記憶に新しいであろう。米務省は2013年に国際テロ組織に認定し、戦闘員は4千～6千人と目されている（東京2/10、毎日1/5ほか）。2014年秋の米研究者の統計によれば、それまでに少なくとも1万1千人が死亡、AFP通信によれば約13万5千人がナイジェリア北東部から逃れ、約85万人が同地域内で避難生活を送っているという（朝日1/20）。

従来のテロ行為は市場や学校といった特定の施設を対象としたいわゆる点の攻撃であったのだが、「イスラム国」の登場によって影響され地域を占拠するという面での支配を拡げており、2014年以降は支配下に置いた町や村を「イスラム国家の一部」にしたと主張している。このようにボコ・ハラムは徐々に支配地域を広げている。

1. ナイジェリア国内の動向

1月3日、北東部ボルノ州バガ近郊のナイジェリア軍基地がボコ・ハラムの襲撃によって、制圧された。当地はニジェール、チャド、カメルーンとの国境近くに位置し、ボコ・ハラム対策のナイジェリア、チャド、ニジェール3ヶ国合同部隊の重要な拠点であった（読売・夕1/5ほか）。6日からは市民への無差別射撃、家の焼打ちが始まり、少なくとも100人以上が殺害された（朝日1/10）。

1月25日にはボルノ州の州都マドゥグリ等をボコ・ハラムが襲撃、ナイジェリア軍と戦闘となり、双方で200人以上の死者が出た。同日、ケリー米国防長官がナイジェリアを訪問し、ジョナサン大統領とボコ・ハラム対策について協議しており、これに併せての襲撃との見方もある（朝日・夕1/26ほか）。2月1日には再度ボコ・ハラムはマドゥグリを攻撃、軍や自警団などが撃退したものの、8人が死亡した（毎日2/3ほか）。

2月18日、ナイジェリア軍はボコ・ハラムが掌握していた東北部の11の町や村を奪還し、戦闘員300人以上を殺害したと発表した。これまで守勢に立たされていたナイジェリア軍であるが、2015年になり周辺国が掃討作戦に加わるようになり、攻勢に転じた（東京2/19ほか）。2月21日には1月3日に占拠されたボルノ州のバガの奪回に成功した（赤旗2/23）。

(1) 繰り返される拉致

ボコ・ハラムの名を広く知らしめたのは女子生徒の拉致であったが、こうした行為は今も繰

り返されている。2014年12月31日には、ボコ・ハラムとみられる武装集団が銃をそなえつけたトラックで、北東部ボルノ州のマラリ村を襲撃し、10歳から23歳の男性40人を拉致した。組織の戦闘員として使うため拉致されたとみられている(朝日1/5ほか)。

チャドとニジェール軍によって3月21日にボルノ州ダマサクが奪還されたが、解放された市民の話によればボコ・ハラムは町の制圧時に400人以上の子どもや女性を拉致し、また、逃走の際にも500人以上の子どもや若い女性を連れ去り、そのうち約50人は殺害されたという(毎日・夕3/25ほか)。こうして連れ去られた少年は戦闘員にされたり、少女は自爆攻撃をさせられたりしているとみられている。

(2) 少女をつかった自爆テロ

ボコ・ハラムは自爆テロを繰り返しているが、近年少女らを自爆犯としたものが頻発している。1月10日にはマイドゥグリの市場で10歳位の女兒が持っていた爆弾が爆発。少なくとも19人が死亡した。女兒が市場の入り口でボディチェックを受けている際に爆弾が爆発。目撃者によれば、女兒は自分が何を持っているのかもわかっていなかったのかもしれないと述べている。翌11日にはヨベ州ポティスクムの市場で10代半ばほどの少女2人による自爆テロが発生、4人が死亡した。爆弾は遠隔操作されていたとみられている(読売1/14ほか)。

2月15日、ヨベ州ダマトゥルの混雑するバス停で女による自爆テロが発生。10人が死亡し、30人が負傷した(東京2/16ほか)。2月22日にはヨベ州ポティスクムで7歳くらいの女兒に装着された爆弾が爆発、少なくとも5人が死亡し、19人がけがをした(朝日2/23ほか)。2月24日にもポティスクムで10代とみられる少女による自爆テロが起き、15人が死亡、53人が負傷した(産経2/25)。3月10日にはマイドゥグリの市場で10代の少女による自爆テロがあり、少なくとも34人が死亡した(東京3/12ほか)。これらのテロは犯行声明の出していないものもあるが、いずれもボコ・ハラムによるものと見られている。

こうした少女による自爆テロが相次ぐ中の3月1日、北東部バウチの市場で少女が自爆テロ犯ではないかと疑われ、群衆から暴行を受けて殺害され、その上で遺体も焼却されるという事件が起きた。少女が実際に自爆テロを試みようとしていたかはわかっていない(産経3/3ほか)。

2. 周辺国へ展開するボコ・ハラム

(1) カメルーン 国境線付近での攻防

2014年12月28日、千人規模の集団がカメルーン北部のリマニ等5つの村を襲撃、軍施設を一時占拠するなどした。1月12日には数百人規模のボコ・ハラムとみられる武装集団がカメルーン国内に越境、北部コロファタの軍事基地を襲撃した。カメルーン軍の反撃によってボコ・ハラムは撤退した。ボコ・ハラムは濃霧に乗じて越境、戦闘は5時間以上続き、ボコ・ハラム側の戦闘員140人以上が死亡し、カメルーン軍兵士も1人死亡した(朝日1/14)。

1月18日にはカメルーン北部の複数の村をボコ・ハラムが攻撃、10～15歳の約50人を含む住民約80人が拉致された。19日にカメルーン軍がナイジェリアに戻ろうとする武装集団を追跡し24人を保護したが、ボコ・ハラムによるカメルーンでの拉致としては最大規模のものとなった(朝日1/20ほか)。

チャド軍はカメルーン北部にボコ・ハラムを制圧するため400台の軍用車両を派遣していたが、1月30日、その部隊がボコ・ハラムを撃退し、123人を殺害したと軍部が発表、チャド

側も兵士3人が死亡し、12人が負傷した（東京2/1）。この報復として2月4日北部フォトコルにボコ・ハラムが侵入、100人以上の住民を虐殺した。ボコ・ハラムはナイジェリア北東部のガンボルから越境、モスクや住居を放火し、住民を殺害した。カメルーン政府によれば、カメルーン軍がボコ・ハラムの戦闘員約50人を殺害し、撃退したという（朝日・タ2/5ほか）。2月8日にはボコ・ハラムとみられる武装集団がナイジェリア国境付近の市場に向かっていたバスを襲撃、乗客ら少なくとも10人以上が殺害され、20人が拉致された（赤旗2/11）。2月16日にはカメルーン北部でカメルーン軍とボコ・ハラムが戦闘をおこない、ボコ・ハラムの戦闘員86人が死亡した（赤旗2/18）。

(2) チャド ナイジェリアへの精鋭部隊の派遣とボコ・ハラムの反撃

上記のように1月、チャド軍はカメルーン支援のため、カメルーン領内に展開していたが、2月3日にはボコ・ハラム掃討のためナイジェリア領内へと侵攻した。チャド軍の装甲車両と約2千人の兵士はカメルーンとの国境にほど近いガンボルに進駐し、ボコ・ハラムの戦闘員200人以上を殺害した。チャド軍側は9人が死亡した。チャド軍は実践経験が豊富な精鋭部隊であり、2013年1月のマリ北部のイスラム過激派掃討作戦でフランスに並ぶ多国籍部隊の主力となっていた（毎日2/5ほか）。

こうしたチャド軍の動きへの報復として2月13日、ボコ・ハラムが国境を越えてチャドの村を攻撃した。村人ら5人が殺害されたが、軍が撃退した。チャドとナイジェリアの間にはチャド湖があるために、陸路での侵入は不可能。そこでボコ・ハラムの戦闘員30人ほどがカヌーで湖を渡りチャドのヌグブア村を襲撃した。ボコ・ハラムがチャドを攻撃したのはこれが初めてとなる（読売2/16ほか）。

(3) ニジェール 非常事態宣言の発令へ

2月6日、ナイジェリアとの国境の町ボツソにボコ・ハラムが侵攻し2つの町を攻撃した。ニジェール軍とニジェールを支援するチャド軍が応戦し、ボコ・ハラムの戦闘員109人を殺害し撃退したが、ニジェール軍兵士4人も死亡した。ボコ・ハラムがニジェールを大々的に攻撃するのは初めてのことであり、ボコ・ハラム掃討のためニジェール政府は軍をナイジェリアへ2月9日に派遣する決議をする予定であり、その報復のための攻撃とみられている（東京・タ2/7ほか）。なお、9日には予定通り議会でナイジェリア領内への750人規模の部隊の派遣が承認された（赤旗2/11）。2月10日にはボコ・ハラムからの攻撃の激化のため、ナイジェリアと国境を接する南東部ディファ州に15日間の非常事態宣言を発令した（読売2/12ほか）。

3月7日にはボコ・ハラムの指導者アブバカル・シェカウ容疑者が「イスラム国」に忠誠を誓うとする声明をインターネット上に公表した。これによりサハラ以南に初の「イスラム国」傘下の組織が生まれたことになる。ボコ・ハラムは2002年の設立以降国際テロ組織アルカイダと連携し、2014年7月には「イスラム国」への支持を表明していた（朝日3/9ほか）。一方で、12日には「イスラム国」の最高指導者とされるバクダディ容疑者の報道官は「われわれのカリフはボコ・ハラムの忠誠を受け入れた。西アフリカのイスラム教徒と聖戦の兄弟を祝福する」との声明を発表した（赤旗3/14）。このようにボコ・ハラムは「イスラム国」と共闘することで周辺国への展開をすすめている。

[文責：藤野陽平]